

余っている食品、日用品を必要な方へ
 フードバンクきよせ（清瀬市社会福祉協議会）
 星野 孝彦さん

目標 1
 目標 12




社会福祉協議会では、コロナ禍により生活福祉資金貸付の相談が、週に50件前後、入るようになりました。そこで、食の確保に困る方をサポートしようと、昨年7月に『フードバンクきよせ』を立ち上げました。広く市民や事業者に食品などの寄付を募り、生活にお困りの方や、子ども食堂、福祉施設などへつなげているところですよ。

活動の中心は、20名あまりの市民ボランティアで、仕分け作業や食品を広く募る取り組みに積極的に取り組んでいます。寄付いただく方のほとんどは、市民の方からです。何より皆さんにこの活動を知っていただきたいです。今後は学校・職場などで呼びかけて、家庭や職場で余っている食品を持ち寄ってもらう『フードドライブ』を実施し、関心を広げ、寄付しやすい場を増やしていければと考えています。

食品を受け取った方からは、「前向きになって就職できました」とお手紙をいただき、食だけでなく心の応援にもなっているようです。

フードバンク活動は、皆様の善意と行動によって、さまざまな市民のニーズをつないでいけるものだと思います。

（中山）

結核のない世界を目指して
 公益財団法人結核予防会 結核研究所
 所長 加藤 誠也さん

目標 1
 目標 10




結核は薬で治る病気ですが、途上国を中心に年間140万人が死亡しています。結核の診断・治療が世界に行き渡っていないからです。貧困、不平等、大気汚染、教育など、さまざまな分野と課題を共有しています。SDGsの目標3に結核の根絶が入ったことは、大きな意義があります。WHOの結核対策は、日本人の古知新博士らによって1994年に始まったDOTS戦略※を皮切りに、終息を目指した大きな流れにつながっています。

結核研究所は、基礎研究、臨床、国際協力、国内外への研修等を行なっています。BCGワクチン粉末凍結技術は当研究所で開発され、世界中に広まっています。結核に関するあらゆる分野にわたる研究は、世界に類のない大きな特徴です。また、結核患者が減ると専門家も少なくなるので、当研究所の技術支援の役割は大きくなります。

コロナ禍の影響で、国内結核患者登録数が昨年同時期と比較して13%減少しています。コロナを恐れての受診控えや検診の休止が原因です。結核の発見の遅れは、病状が進行し、感染を広める可能性があります。WHOは、「世界の結核患者の発見や治療が3か月間25%減少すると、結核による死亡者が19万人増える」と警告しています。結核に対しても、決して手を抜けない状況が続いています。

（中嶋）

※確実に治療が行われるように患者の服薬を第三者が見守る仕組み

清瀬市におけるSDGsの取組について
 清瀬市企画部企画課
 長塩 美沙子さん



令和元年12月に示された国の「SDGs実施指針改定版」では、SDGsを原動力とした地方創生推進の方向性が打ち出されています。こうした国の動向をふまえ、清瀬市では、地域づくりの方向性や具体的な取り組みを示す「第4次清瀬市長期総合計画・実行計画（令和2～4年度）」において取り組みとして掲げている39施策とSDGsの17のゴールの関係を示しています。

市として取り組むべき地域課題は多岐に渡り、SDGsの理念と大きく結びついています。例えば、市内の自然を維持管理するための副産物（枝や落ち葉等）をウッドチップ・腐葉土などにリサイクルし、産業廃棄物削減を目指す「清瀬エコプロモーション」の取り組みもその一つ。こうした市の取り組みの推進によって、地域課題の解決を図り、SDGsの目標達成に寄与していきたいと考えています。

現在、SDGsは個人・企業問わず社会の共通言語となりつつあります。こうした情勢をふまえ、SDGsを切り口に市民や事業者との連携の可能性など、政策のあり方を模索していきたいと考えています。

（寄稿）

清瀬市内にある多様な人材・団体は、市民活動の積み重ねによる財産といえます。

1月に新成人を見かけました。春には、新社会人が入社します。これから彼らの活躍する時代はSDGsが目標達成された世の中になってほしいものです。そのきっかけになるように今号の特集を多くの方に読んでいただきたいです。